

春燈

8月号



昭和二十一年七月一日 第七百一十号

月刊 春燈 第八卷 第八号

昭和二十一年七月一日 第七百一十号

敦の句

鞠躬如として雛市に従へり

句集『午前午後』昭和四十七年

「お雛様を買いに行くんだけど一緒に行って下さる」と奥様のお声。初孫の雛の節句も近く、敦先生は二つ返事でお供する。〃鞠躬如として〃とこんな軽快な句は他にあるだろうか。旅に執筆にと多忙を極め、壮年期とも言える六十三歳の作。へ妻がゐて子がゐて孤独いなし雲〓とは対極の氏の一面が見えて嬉しい。毎年、雛売場を通りかかるとこの一句が口を衝いて出て私も弾む

西川保子

敦の句

夕爾忌やあがりて見えぬ夏ひばり

句集『午前午後』昭和四十七年

木下夕爾一周忌（三句）の中の一つ。二人のまじわりは戦時中、敦のやっていた「多麻」に、夕爾が乞われて詩と俳句を寄せたのに始まる。戦後夕爾は「春燈」に参加し、敦と作品を競いつつ協力を惜しまなかった。年譜を編んでいて幾度も二人の交誼の厚さをうらやんだ。掲句は夕爾句碑建立の際のもの。声ばかりの夏ひばりを仰ぐ敦の深い悲しみを感じる。八月四日夕爾四十一回忌。

松本俊介

主宰の句

西ヶ原日記 (九)

鈴木榮子

形代に亡母の名も添へ納めけり

常照皇寺片陰の縁に持参の齋

常照皇寺に聴く老鶯は宜々し

山国御陵黒蟻大きすぎる腰
冷奴もとより嵯峨の森嘉かな
永観堂の正面左さるすべり
鍵膳の二階の敦真砂女きくの
葛切を食べずじまひに四條かな
三條小鍛冶詠みし人はも夏見舞
旅ごころ募りてをりし端居かな

動物園

三上程子

茂る中コンドルの檻動きだす
万緑や豹の眼光衰へし
手長猿入道雲を引き寄する
カンガルーの袋大事に昼寝せり
同病相憐むなまけものと涼み
緑陰にしま馬縞をゆるめけり
遁世の横顔ばかり山椒魚
動物園の隅にみごもる目高かな
胴ぶるひして西日を振ひ落す象
蚊喰鳥革命の風起しけり

夏 落 葉

大 嶋 洋 子

麦秋やひかりを返す入間川
薫風の羅漢五百を渡りくる
老鶯や枯山水の石の層
滝しぶき届く吊橋渡りけり
更衣ちちはは姉の亡き世かな
再会や仏足石に夏落葉
大夕焼海に溶けゆく母郷かな
人恋うて沖を見てゐる晩夏かな
三伏や十三穀の飯を炊く
独り居の薔薇の香たかき至福かな

当月集

鈴木 榮子選



○ 白神知恵子

しなしなと京夏菓子のおしながき
京言葉途切れし辺り行々子
落し文弊衣破帽を恋ひし日も
夏燕鞍馬の社へ突き刺さる
緑陰や手鏡ほどの水溜り

○ 市川玲子

薔薇活けて香炷き古家と別れけり(家建替を)
薔薇垣に薔薇好き声をかけくれし
軍隊行李は夫の青春麦の秋
家移りやまづ香水をカーテンに
一部屋で足りる暮しや緑さす

○ 宮地れい子

未練なし崩るる牡丹のきのふ今日
尊菜のぬめりも馳走切子鉢
風誘ふジャワの更紗の夏暖簾
水無月や有松絞り藍深し
百円の寄進の石碑苔の花

十年一日の如しや紙魚の銀
落つる葉は落として卯月八日かな
今朝の夏葛根湯と目薬と
ゆきずりの香水の香におぼえあり
食べず嫌ひの玉葱に芽の出でし

春燈の句

鈴木 榮子選

一菩薩老いめざましき練供養

三重 上野 進

風薫る恋の二人ロマンのチャペル

藤の花子に随ふもときにあはれ

青嵐回転木馬の空回り

滝といふ不意の仕掛けに水怒る

鄙住み碧水深し麦の秋

鱧の口ドレミファソして売られぬる

紫陽花の毬揺れ風の道を知る

山梨 古屋 喜水

母の日や父にも別の包あり

東京 藤田 信義

妻の箸捨て去り難し春厨

早苗田に鴉一羽の遊びをり

妻逝けり肩に来し蚊を叩かずに

地藏詣日影に老の集ひくる

妻逝きてただうろうろと春座敷

スズランや来客迎へしごとく咲き

絵巻とくさまにほぐるる牡丹かな

岡山 中桐 葉子

どうだんの新芽の伸びや母亡きあと

東京 久永 淳子

メイストーム砂が砂追ふ大砂丘

豆飯を一合炊きて独りかな

力抜くことは良薬菖蒲の湯

海軍の暗号交はし鯉釣り

初夏や「魔女の一撃」子に及ぶ

夏木立気高き貌の犬を連れ

幸吉の飛びし河原や夏あざみ(世界初の飛行者)

岡山 間野 瑛子

緑陰のグアム島上陸記念碑撮り

台北 林 雪江

うごめける花粉まみれの金亀虫



余言

鈴木 榮子

滝といふ不意の仕掛けに水怒る 上野 進

この句を拝見し、マリリンモンロー主演の「ナイアガラ」というサスペンス映画を思い出しました。

さてこの句は前の話とは全く別で、日常にもよくあることです。滝という仕掛けがあるなら言つて呉れなくては困るじゃないか、と水が怒っているのです。ただ普通はこういう場合必ず言つたと表現しがちです。「不意の仕掛け」この用語がこの句の生命です。

面白い句です。人生知つたようなことをいってもそのようです。用心ばかりしていたらつまらない人生になってしまうでしょう。

かたむける瓶にコツありラムネのむ 浦岡 瑠璃

夏、祭、緑日、と来るとラムネが浮び上つて来るが、だからといって物心ついてラムネをかたむけた記憶は余りない。あれは子供や少年の飲みもので、瓶の途中のラムネ玉をよけながら飲むことは女性にはちよつと苦手だ。一にも二にもあのシヨッキンダな瓶の形とラムネの栓を抜き、シューっと中の炭酸の煙が出るのが面白く、女性でもちよつと食指が動くものだ。

母の日や黄泉行き現金書留で

和田 絢子

作者が若いだけに考えることも現実的で健康である。

それにしてももう母上を送られたということは、母も娘もまだまだ旅行も観劇もお出来になる齡なので、もっと母に尽くして上げたかったというお気持が現実的な言葉の中にもよく表れている。かの世で母上はきつと笑つていらつしやるであらう。もっと早く実行して欲しかったと。